

# アサーションの規定因に関する研究の動向と問題

高橋 均

(2006年10月5日受理)

Trends and problems pertaining to determinants of assertive behavior

Hitoshi Takahashi

The purpose of this paper is to review the trends and problems of previous research studies related to the determinants of assertive behavior.

In earlier researches, the effects of various personality factors have been identified as determinants of assertive behavior. However, while these studies have provided investigations into factors such as irrational beliefs and self-esteem, there is a need to expand the research efforts. Currently, there is lack of investigations pertaining to the effects of the environmental factors, and the effects of the interaction between personality and environmental factors upon assertive behavior. These deficiencies have rendered previous inconclusive studies requiring further investigations. Therefore, this paper will advance the research effort by providing comprehensive perspectives of both the personality and environmental factors.

Key words: Assertion, Assertive behavior, Assertiveness, Determinants of assertive behavior, Interaction

キーワード：アサーション，アサーションの規定因，相互作用

## 1. はじめに

本論文の目的は、アサーションの規定因に関する先行研究の動向を概観し、課題を展望するところにある。

我々は、他者との会話中や、集団での話し合いに参加しているとき、言いたいのに言えないという思いをもつことがある。言いたいのに言えない者は、未練が残り、欲求不満がたまり、人とつきあうのがおっくうになったり、心身症やうつ状態になったりすると指摘されている(平木, 1993)。なぜ言いたいのに言えない

のか、この現象の原因解明や、改善に関する心理学的研究は、アサーションに関する研究パラダイムから検討されてきた。

中央教育審議会答申(明石, 1998)が指摘するように、教育現場においても子どもたちが自分の考えを表現することの重要性が指摘され、子どもがあまり自分の思いを表現しない原因の解明は教育課題の1つとなってきた。この今日的教育課題を解決する上で注目されている概念がアサーションである。

最近ではアサーション促進を目的としたアサーション・トレーニングの研究や実践が盛んである。総合的な学習の時間の中で、アサーション・トレーニングの授業を行っている学校があるほどである(豊田, 2000)。また、アサーション・トレーニングのプログラムを教師向けに記した著作『教師のためのアサーション』(園田・中釜・沢崎, 2002)、『子どものためのアサーショングループワーク』(園田・中釜, 2000)等も出版されている。欧米においても、Alberti &

---

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：石井眞治(主任指導教員)、前田健一、森 敏昭

広島大学大学院教育学研究科の神山貴弥助教授より多くの御指導を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

Emmons (2001) の『*Your Perfect Right*』, Bower & Bower (2004) の『*Asserting Yourself*』が広く普及している。

このように盛んなアサーション・トレーニングに関する研究や実践は、アサーションの規定因解明の研究の成果に基づいてなされている。アサーションの規定因解明の研究は1970年代、1980年代頃盛んに行われていた。しかし最近ではトレーニングへの関心の方が高くなり、規定因解明の研究はとてま少なくなくなってきている。そんな中、柴橋 (1998) は、アサーションを規定している認知、情緒、動機づけ等を検討することがまず求められていると指摘している。このようにアサーションの規定因解明の研究は、さらなる進展が求められている。アサーションの規定因解明の研究が進展することは、アサーションの促進へ向けた環境づくりやアサーション・トレーニング等による支援方法の進展につながると考えられる。

## 2. アサーションとは

### (1) アサーションの定義

アサーションとは、「他人の権利を侵害することなく、個人の思考と感情を敵対的でない仕方では表現する行動」のことで (濱口, 1994)、精神的健康と良好な人間関係をともたらず行動である (平木, 2005; 中釜, 2005)。アサーションというカタカナ語が用いられている理由は、我が国では、仮に主張と訳せば、自分勝手や我が強いという否定的で誤った印象を与えてしまうからである (沢崎・平木, 2005; 柴橋, 1998)。

### (2) アサーションを表す概念

アサーションを表す用語としては、Assertive behavior, Assertiveness, Assertion の3つがある。Assertive behavior は行動を表す用語である。Assertiveness については、Deluty (1979) が能力と捉えている。しかし、濱口 (1994) は Assertiveness を人格的特性と捉え、Galassi, Delo, Galassi, & Bastein (1974) や Lee (1984) は行動と捉えている。Assertion については、Galassi & Galassi (1978) が行動と捉えている。このように用語の使用について様々なものがあつたが、近年アサーションの研究を整理した柴橋 (1998) が、Assertive behavior, Assertiveness, Assertion は同じ意味で用いられているとしている。本論文では、先行研究で位置づけが一貫している Assertive behavior の用語を用い、アサーションを行動と捉える。

### (3) アサーションの種類

アサーションにはいくつもの種類がある (濱口, 1994, Lazarus, 1973, Leah, Law, & Snyder, Jr., 1979, 柴橋, 2001, 菅沼, 1994)。

濱口 (1994) は、アメリカで開発されたアサーション尺度の整理を通して、権利の防衛、要求の拒絶、異なる意見の表明、個人的限界の表明、他者に対する援助の要請、他者に対する肯定的感情の表明の6種類があるとしている。

また、柴橋 (2001) は因子分析によって検討を行い、限界・喜びの表明、意見の表明、不満・要求の表明、断りの表明の4種類があるとしている。限界・喜びの表明は、つらさやうれしさ、困っていること等を隠さずに伝える表現に関する項目、意見の表明は、まわりと違っていても自分の意見を言い、まわりの人々に迷惑な行動に対して注意する表現に関する項目、不満・要求の表明は、自分の権利が相手の言動によって不当に侵害されたとき、行動を改めてくれるように要求する表現に関する項目、断りの表明は、依頼や要求に応じることが自分にとって負担であるとき断る表現に関する項目で、それぞれ構成されている。柴橋 (2001) が示した限界・喜びの表明のアサーションは、濱口 (1994) が示した個人的限界の表明、他者に対する援助の要請、他者に対する肯定的感情の表明のアサーションを包含したものである。

### (4) アサーションの検討の仕方

このように、アサーションには複数の種類があるため、アサーションの検討の仕方には様々なものがある。従来の研究における検討の仕方を整理すると、以下の3通りになる。

1つめは、複数の種類をまとめて1つの包括的な概念としてアサーションを捉え、検討したものである (Eisler, Frederiksen, & Peterson, 1978; Lee, 1984)。

2つめは、複数の種類のアサーションをそれぞれ検討したものである。このような研究には、柴橋 (2004) など、アサーション尺度を因子分析して探索的にアサーションを複数の種類に分類し、他の要因との関係を検討したものがある。

3つめは、特定の1種類のアサーションを対象として検討したものである。このような研究は、結果期待等アサーションの生起にかかわる認知的要因を扱った研究においてみられる。対象になってきたアサーションの種類は、要求拒絶のアサーション (Arisohn, Bruch, & Heimberg, 1988; Bruch, Kafowitz, & Berger, 1988; Fiedler & Beach, 1978; Kuperminc & Heimberg, 1983; Zollo, Heimberg, & Becker, 1985)、権利の防衛のア

サーション (濱口, 1993; 久木山, 2002) である。

### 3. アサーションの規定因に関する 先行研究の動向

まずアサーションに関する研究の端緒について述べる。その後、アサーションの生起に関する先行研究について、個人要因と環境要因に整理して動向を概観する。

#### (1) アサーションに関する研究の端緒

アサーションに関する研究は、臨床心理学的分野の療法 (アサーション・トレーニング) に関する研究に端を発す。アサーション・トレーニングは1940年代後半以降、行動療法の研究者たちによって検討され始めた (菅沼, 2002)。行動療法の立場では、アサーション・トレーニングを行い、アサーションのスキルを高めることができれば、アサーションをするようになると考えていた。しかし、アサーションのスキルを持っているにもかかわらずアサーションできない人があることから伺われるように、スキル不足だけでなく、歪んだ認知もアサーションを抑制しているという指摘がなされるようになった (Alden & Cappe, 1981; Alden & Safran, 1978)。

そのため、アサーション・トレーニングは、アサーションのスキルを高めることに加えて、アサーションをすることを肯定的に捉えられるようにすることを目的とした認知行動療法として位置づけられるようになった。現在も、認知行動療法としてのアサーション・トレーニングが盛んに行われている (Alberti & Emmons, 2001)。

#### (2) 個人要因

アサーションと個人要因との関連を検討した研究を、i) 特定の個人要因に焦点を当てた研究、ii) 個人要因を探索的に検討した研究に整理して概観する。

##### i) 特定の個人要因に焦点を当てた研究

###### スキル不足

McFall & Twentyman (1973) や Heimberg & Becker (1981) は、アサーションを学習されるものとして捉えている。そのため、トレーニングでは、対象者に対してアサーションのモデリング、正確なフィードバック、繰り返しや強化等を行うことにより、アサーションの学習経験、実践経験を積みませれば、アサーションができるようになると指摘している。このスキル不足の改善によりアサーションが促進されることを実証的に検討した研究が行われている (Eisler, Blanchard,

Fitts, & Williams, 1978; Eisler, Hersen, & Miller, 1973; Goldsmith & McFall, 1975; Hersen & Bellack, 1976; Hersen, Eisler, Miller, Johnson, & Pinkston, 1973; McFall & Lillesand, 1971; McFall & Marston, 1970)。例えば、McFall & Lillesand (1971) は、モデリングやコーチングを取り入れた行動リハサナル療法を行うことにより、事前テストから事後テストにかけて、実験群の自己報告尺度によるアサーション得点が向上し、非主張的行動得点が低下することを明らかにしている。また、ロールプレイ中の反応に対する他者からのアサーション評価の得点も向上することを明らかにしている。

#### 不合理な信念 (Irrational Beliefs)

不合理な信念とは、対象に対する歪曲した認知を引き起こす個人の信念のことで、アサーションに否定的影響を及ぼすものとされている。具体例としては、「危険で、恐怖を起こさせるようなものに向かうと、不安になり、何もできなくなる」、「人は完全を期すべきで、失敗をしてはならない」、「そんなことをしたら大変なことになる」等 (平木, 1993) がある。Kushnir & Malkinson (1993) は、不合理な信念を減少させることによってアサーションが向上することを明らかにしている。

#### スキル不足か歪んだ認知か

これまでアサーションと個人要因との関係に関する先行研究では、アサーションの抑制因として、スキル不足説、歪んだ認知説という2つの見解が挙げられてきた (Fiedler & Beach, 1978; Alden & Cappe, 1981)。この歪んだ認知の代表的なものが不合理な信念である。

スキル不足と、歪んだ認知の両方が深刻な抑制因であるという立場の研究者がいる (Alberti & Emmons, 2001) 一方で、スキル不足よりも歪んだ認知の方が深刻な抑制因であるという立場の研究者がいる (Alden & Cappe, 1981)。スキル不足、歪んだ認知のいずれが深刻な抑制因かという点から従来の研究を整理すると、歪んだ認知がアサーションの抑制因であることを示している研究が多い (Alden & Cappe, 1981; Alden & Safran, 1978; Kushnir & Malkinson, 1993)。

Alden & Cappe (1981) の研究では、大学生を対象として検討し、スキル不足の指標として、ロールプレイ中の行動について、アサーティブかどうか評定を行った。その結果、アサーション高群とアサーション低群との間に差がないことを示した。しかし、歪んだ認知の結果についてみると、アサーション低群は、アサーション高群に比べて、自分自身をアサーション度が低いと捉えていること、アサーション低群はアサー

ション高群に比べて不合理な信念が高いことを報告している。

### 自尊感情 (Self-esteem)

自尊感情とは、自分を大切な人間と思える感覚のことである(園田, 2002)。園田(2002)は、「個人に自尊感情があれば自分なりに表現してもいいのだと思いきやすく、最初からうまく表現できなくてもいい、できるところで表現してみよう、といった一歩が踏み出しやすくなる」と述べている。また、無藤(2005)はアサーション・トレーニングによって自尊感情を高めることができるかと述べている。つまり、自尊感情が高ければアサーションをするようになることに加え、アサーションをすることで自尊感情が高まるという循環的關係がある。さらに、Rogers & Petrie (2001) はアサーションと自尊感情とが有意な正の相関を持つことを明らかにしている。

### 自己信頼 (Self-confidence), 自己理解

園田・中釜(2000)によると、自己信頼とは「私には失敗や短所などもあるが、それをひっくるめてこの自分を私なりに大切にしていこう。この世に私という人間は一人だし、他ににとって替わることのできないかけがえのない存在なのだから。私は私なのだから」といった感覚のことである。Gay, Hollandsworth, & Galassi (1975) は、アサーションと自己信頼とが正の相関を持つことを明らかにしている。自己理解とは自分を理解することである。園田・中釜(2000)は、自分を理解していれば、相手に何を言いたいのかがはっきりし、自己信頼も育ちやすく、それらに基づいてアサーションがしやすくなると述べている。

### アサーション権の認知

アサーション権の認知は、自分はアサーションする権利を持っているのだと認知している程度を表す概念である。アサーションの研究が盛んになった背景の1つには、1960年代から1970年代にかけてのアメリカにおける基本的人権をめぐる人権拡張・差別撤廃の運動がある。そのため、Alberti & Emmons(2001)のアサーションに関する著名な研究書のタイトルが『*Your Perfect Right*』(あなたの完全な権利)になっているほどである。アサーション権の具体例としては、「人は誰でも自分の気持ちや考え、意見、希望等を言ってもいい」、「ときには頼まれたことを断るのも悪いことではないし、自分勝手というわけでもない」、「自分の話や考えを他の人に聞いてもらいたいときには、そのことを相手に伝えてもいい」等がある(渡部・稲川, 2002)。従来の研究では、アサーション権の認知が、アサーションをしないことに対して有意な負の影響を及ぼすことが明らかにされている(渡部・稲川, 2002)。

### アサーションへの評価

アサーションへの評価とは、アサーションそのものを肯定的に評価しているかどうかという概念である。従来の研究では、アサーション高群がアサーション低群よりもアサーションを魅力あるものと評価していること(Kern, 1982; Zollo, Heimberg, & Becker, 1985)、アサーション低群がアサーション高群よりも非主張的行動を有能な行動と評価していること、アサーション低群がアサーション高群よりもアサーションをあまり好ましくないと評価していることが明らかになっている<sup>1)</sup>(Kern, 1982)。

### 対人不安 (Social anxiety)

Chambless, Hunter, & Jackson (1982) は、大学生と恐怖症患者とを対象に、Gambrill & Richey (1975) の Assertion inventory と、対人不安の指標として Watson & Friend (1969) の fear of negative evaluation, social avoidance and distress scale を実施して検討した。その結果、アサーションについては、恐怖症患者が大学生よりも低く、対人不安については、恐怖症患者が大学生よりも高かった。そのため、対人不安はアサーションと負の相関があるとしている。また、渡部・稲川(2002)は、アサーションを測る児童用自己表現尺度を作成して実施し、児童用対人不安傾向尺度(松尾・新井, 1998)の得点との相関を検討したところ、有意な負の相関があることを明らかにしている。

### シャイネス (Shyness)

玉瀬・越智・才能・石川(2001)は、アサーションとシャイネスとの関係を検討し、鈴木・山口・根建(1997)のシャイネス尺度(Waseda shyness scale)のすべての下位因子とアサーションとが負の相関を持つことを示している。

### 効力期待(自信) (Efficacy Expectation), 結果期待 (Outcome Expectation), 効用評価 (Utility)

効力期待とは、アサーションをどの程度上手にできるかに関する期待である。結果期待とはアサーションをしたことによって、どのような結果が生じるかに関する期待である。効用評価とは、アサーションする又はアサーションしないことによって生じることが予想される結果の望ましさに関する評価である。

効力期待について、Lee (1984) は、効力期待がアサーションに有意な正の影響を及ぼすことを明らかにしている。また、宇部(2000)は、効力期待と類似した概念の自信とアサーションとの関連を検討している。その結果、自信とアサーションとが有意な正の相関を持つことを明らかにしている。

結果期待について、Arisohn, Bruch, & Heimberg (1988) は、アサーション高群がアサーション低群に

比べて結果期待が肯定的であることを明らかにしている。また、Fiedler & Beach (1978) も、アサーション高群はアサーション低群に比べて、アサーションすることによる肯定的結果の期待が高く、アサーションすることによる否定的結果の期待が低いことを明らかにしている。

効用評価について、Kuperminc & Heimberg (1983) は、他者から要求を受ける場面を対象に検討した。その結果、アサーション高群がアサーション低群に比べて、アサーションをしないことによる否定的結果の効用評価が低く、アサーションをすることによる肯定的結果の効用評価が高いことを明らかにしている。また、高橋・石井 (2005) は、他者から受ける要求の不当性が低い場面では、アサーションをしないことによる肯定的結果、アサーションをすることによる否定的結果に対する効用評価が、アサーションに有意な影響を及ぼすことを明らかにしている。

#### ii) 個人要因を探索的に検討した研究

柴橋 (2004) は、調査的面接と自由記述式調査を通してアサーションに関連する心理的要因に関する項目を収集し、質問紙調査を実施した。心理的要因を因子分析した結果、安心感、配慮・熟慮、率直さへの肯定感、スキル不安、支配欲求を見出している。続いてアサーションへの影響を検討した結果、安心感、率直さへの肯定感、支配欲求はアサーションへ正の影響を及ぼすが、スキル不安はアサーションへ負の影響を及ぼすことを明らかにしている。また、伊藤 (1998) も、アサーションの心理的要因を検討し、自己表現に対する肯定的態度、他者尊重、合理的信念、率直さへの確信という4つのアサーティブ・マインドがあることを明らかにしている。

このように、スキル不足や、不合理な信念、自尊感情、アサーション権の認知、アサーションへの評価等の影響が検討されてきた。これらは、自らの能力や心理的状态、価値観といった個人要因の影響を明らかにした研究である。これらの個人要因間の関連については、不合理な信念に気づき客観的な思考をすることが自尊感情の向上をもたらすことを明らかにした研究 (Stake, Deville, & Pennell, 1983)、効力期待と結果期待には有意な正の相関があることを明らかにした研究 (Lee, 1984)、効力期待と結果期待には有意な相関がないことを明らかにした研究 (Arisohn, Bruch, & Heimberg, 1988) がある。

#### (3) 環境要因

アサーションを規定する環境要因としては、次のような要因が検討されてきた。

#### ソーシャルサポート (Social Support)

Newby & Schlebusch (1997) は、大学1年生を対象に、アサーションとソーシャルサポートとの関連を検討した。その結果、アサーションとソーシャルサポートが有意な正の相関を持つことを明らかにしている。また、Hersen, Kabacoff, Van-Hasselt, Null, Ryan, Melton, & Segal (1995) は55歳から92歳を対象に検討した。その結果、アサーションとソーシャルサポートが有意な正の相関を持つことを明らかにしている。さらにEskin (1995) は、高校生を対象に検討した。その結果、ソーシャルサポートの中の友人からのサポートとアサーションが有意な正の相関を持つことを明らかにしている。これらの結果が生じたのは、ソーシャルサポートがアサーションの結果期待を肯定的にするためと考えられる。

#### グループサイズ (Group Size)

Benenson, Maiese, Dolenszky, Dolensky, Sinclair, & Simpton (2002) は、小学3、4年生を対象に、アサーションや自己抑制的反応に対するグループサイズの影響を検討した。その結果、グループ内の方が2者関係においてよりも、アサーションが多く、自己抑制的な反応が少ないことを明らかにしている。Benenson et al. (2002) は、この結果が生じたのは、人は2者関係においてアサーションをするならば害が生じ得ると予想するからではないかと考察している。

#### 学級風土 (Classroom Climate)

学級風土は、これまで一般に、児童・生徒の感情や態度、行動に影響する要因として捉えられてきた。Battistich, Solomon, & Delucchi (1993) は、肯定的な学級風土が学業に関する動機付けと有意な正の相関を持つことを示している。また、Short & Short (1988) は、教師サポート、ルールの明確化といった学級風土要因が生徒の課題遂行行動に有意な正の影響を与えたことを示している。

アサーションとの関係については、園田・中釜 (2000) が、アサーションを促進する基盤として学級風土が重要であることを指摘している<sup>2)</sup>。また、高橋 (2006) は学級風土とアサーションとの関係を検討し、学級の規律正しさ、学級への満足感、学級活動への関与度、教師への親近感といった学級風土に対する認知がアサーションを促進することを明らかにしている。

## 4. 課題と展望

以上、アサーションの規定因に関する先行研究の動向を概観した。これまで述べてきたように、アサーションの規定因に関する先行研究では、内的な個人要因と

の関連が中心に検討されてきた。その一方で、環境要因がアサーションにどのように影響を及ぼすのかという観点の研究や、個人要因と環境要因との相互作用の影響に関する研究が不十分な点が課題である。(1) 環境要因の考慮、(2) 個人要因と環境要因の相互作用の考慮に整理して課題を述べる。

### (1) 環境要因の考慮

アサーションの研究における1つめの課題は、環境要因を考慮することである。

行動生起を説明する上で、環境要因の考慮は不可欠である。個人要因だけで行動の生起を説明することはできない。このような、行動の生起にとって、個人要因が重要なのか、環境要因が重要なのかという問題は、人間-環境論争の中で議論されてきた。Ittelson, Proshansky, Rivlin, & Winkl (1974) は、人間-環境の相互交流、つまりトランスアクションの立場から次のような考えを述べている。心理学史において、その考察の焦点は常に環境よりも人間の上に合わされてきた。そういうわけで、理論の多くのものも、環境にははっきりと触れずに、ただ暗黙のうちに述べられただけであった。人間の性質に関心を払っても、環境のそれにはあまり関心を払わなかった。環境は複雑で、さまざまな範囲をもち、エレガントともいべき性質をもっているのに、環境を個々ばらばらの刺激の集まりという以上には考慮を払っていなかった。人間の行動は有機体の条件だけで決定されない。その条件がある程度満たす環境条件に遭わないと行動は起きない。

このように、環境要因は個人要因とともに重要である。最近では環境要因の影響に関する指摘が増え始めている。園田・中釜(2000)は、子どもに対して教師がアサーティブな態度を示す必要性を述べている。具体的には、子どもが教師の思いとは相容れない発言をしたとき、子どもの独自性を受けとめつつも、その子どもとは異なる教師自身の思いを伝える場面が挙げられている。また、園田・中釜(2000)は、「子どもたちは学校で自分の言いたいことをどれくらいいちゃんと言っていると思っているのでしょうか。自分の言いたいことに耳を傾けてもらっているかどうか」と述べている。さらに、小学校にアサーション・トレーニングを導入している豊田(2000)は、学級の中の人間関係では、自分の考えや意見を表明することには消極的で、自分と他人との考えの違いを理解し合ったりするようなコミュニケーション能力が不十分な状況があることを述べている。アサーションの意義について考察している柴橋(1998)は、「自分が他と異なることを極力避けようとする子ども達の姿が

見られ、のびのびと自分らしさを表現することができずに息の詰まるような環境の中にいる」と述べている。今後はこれらの指摘を裏付ける因果関係を明らかにするような検討が必要である。

### (2) 個人要因と環境要因の相互作用の考慮

アサーションの研究における2つめの課題は、個人要因と環境要因が相互に関連し、アサーション生起に至るプロセスを明らかにする研究を進展させることである。アサーション生起プロセスの研究が進めば、アサーションを促進するためにはどの段階の、どの要因に対する改善や支援が重要なのかを明らかにすることができるからである。この生起プロセスについて検討したものに、社会的情報処理モデル(Crick & Dodge, 1994)等に基づいた研究(Asarnow & Callan, 1985; 濱口, 1992; 久木山, 2002)がある。社会的情報処理モデルでは、個人が社会的環境から認知した情報は手がかりの符号化、解釈、目標明確化、反応の探索と構築、反応選択、の5ステップを経て、行動実行のステップに至ることを想定している。また、このモデルでは、個人が経験を通して獲得してきたルール、記憶の貯蔵、社会的知識等のデータベースが各ステップに影響することを想定している。さらに、このモデルでは各ステップにおける情報処理の状態が行動実行に影響を及ぼすと考えられている。また、行動実行ステップの直前の反応選択ステップでは、効力期待、結果期待、アサーションへの評価等が重要な機能として位置づけられる。

アサーションの規定因に関する先行研究で検討されてきたスキル不足、不合理な信念、自尊感情、自己信頼、自己理解、アサーション権の認知、対人不安、シャイネス等の個人要因は、社会的情報処理モデルではデータベースに位置づくと思われる。一方、先行研究で検討されてきたソーシャルサポート、グループサイズ、学級風土等の環境要因は、このモデルでは社会的環境に位置づけられると考えられる。

以上の概観と展望から、今後は、社会的情報処理モデルにしたがって個人要因と環境要因との相互作用、さらには個人要因と環境要因とがアサーションの生起に対して影響するプロセスを詳細に検討し、アサーションの生起モデルの精緻化をさらに図ることが最も重要な課題である。

### 【注】

1) Kern (1982) や Zollo, Heimberg, & Becker (1985) は、Empathic-assertive behavior という語を用い

ている。これは適切な主張行動を表す語であるため、本論文ではアサーションの語で統一している。

- 2) 園田・中釜 (2000) はクラス文化という語を用いている。クラス文化を表す心理学用語は学級風土であることから、本論文では学級風土の語で統一している。

## 【引用文献】

明石要一 (編) 1998 中教審「心の教育」答申読本  
教育開発研究所

Alberti, R. E., & Emmons, M. L. 2001 *Your perfect right*. California: Impact Publishers.

Alden, L., & Cappe, R. 1981 Nonassertiveness: Skill deficit or selective self-evaluation? *Behavior Therapy*, **12**, 107-114.

Alden, L., & Safran, J. 1978 Irrational beliefs and non-assertive behavior. *Cognitive Therapy and Research*, **2**, 357-364.

Arisohn, B., Bruch, M. A., & Heimberg, R. G. 1988 Influence of assessment methods on self-efficacy and outcome expectancy ratings of assertive behavior. *Journal of Counseling Psychology*, **35**, 336-341.

Asarnow, J. R., & Callan, J. W. 1985 Boys with peer adjustment problems. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **53**, 80-87.

Battistich, V., Solomon, D., & Delucchi, K. 1993 Interaction processes and student outcomes in cooperative learning groups. *Elementary School Journal*, **94**, 19-32.

Benenson, J. F., Maiese, R., Dolensky, E., Dolensky, N., Sinclair, N., & Simpton, A. 2002 Group size regulates self-assertive versus self-deprecating responses to interpersonal competition. *Child Development*, **73**, 1818-1829.

Bower, S. A., & Bower, G. H. 2004 *Asserting yourself*. Massachusetts: Da capo press.

Bruch, M. A., Kaflowitz, N. G., & Berger, P. 1988 Self-schema for assertiveness. *Journal of Research in Personality*, **22**, 424-444.

Chambless, D. L., Hunter, K., & Jackson, A. 1982 Social anxiety and assertiveness. *Behavior Therapy and Research*, **20**, 403-404.

Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1994 A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological*

*Bulletin*, **115**, 74-101.

Deluty, R. H. 1979 Children's action tendency scale: A self-report measure of aggressiveness, assertiveness, and submissiveness in children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 1061-1071.

Eisler, R. M., Blanchard, E. B., Fitts, H., & Williams, J. G. 1978 Social skills training with and without modeling for schizophrenic and nonpsychotic hospitalized psychiatric patients. *Behavior Modification*, **2**, 147-172.

Eisler, R. M., Frederiksen, L. W., & Peterson, G. L. 1978 The relationship of cognitive variables to the expression of assertiveness. *Behavior Therapy*, **9**, 419-427.

Eisler, R. M., Hersen, M., & Miller, P. M. 1973 Effects of modeling on components of assertive behavior. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **4**, 1-6.

Eskin, M. 1995 Suicidal behavior as related to social support and assertiveness among Swedish and Turkish high school students. *Journal of Clinical Psychology*, **51**, 158-172.

Fiedler, D., & Beach, L. R. 1978 On the decision to be assertive. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **46**, 537-546.

Galassi, J. P., Delo, J. S., Galassi, M. D., & Bastein, S. 1974 The college self-expression scale: A measure of assertiveness. *Behavior Therapy*, **5**, 165-171.

Galassi, M. D., & Galassi, J. P. 1978 Assertion: A critical review. *Psychotherapy: Theory, Research and Practice*, **15**, 16-29.

Gambrill, E. D., & Richey, C. A. 1975 An assertion inventory for use in assessment and research. *Behavior Therapy*, **6**, 550-561.

Gay, M. L., & Hollandsworth, J. G., & Galassi, J. P. 1975 An assertiveness inventory for adults. *Journal of Counseling Psychology*, **22**, 340-344.

Goldsmith, J. B., & McFall, R. M. 1975 Development and evaluation of an interpersonal skill training program for psychiatric inpatients. *Journal of Abnormal Psychology*, **84**, 51-58.

濱口佳和 1992 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究 教育心理学研究, **40**, 224-231.

濱口佳和 1993 児童の主張的行動の結果予期に関する研究 教育相談研究, **3**, 73-80.

濱口佳和 1994 児童用主張性尺度の構成 教育心理学

- 研究, 42, 463-470.
- Heimberg, R. G., & Becker, R. E. 1981 Cognitive and behavioral models of assertive behavior: Review, analysis and integration. *Clinical Psychology Review*, 1, 353-373.
- Hersen, M., & Bellak, A. S. 1976 A multiple-baseline analysis of social skills training in chronic schizophrenics. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 9, 239-245.
- Hersen, M., Eisler, R. M., Miller, P. M., Johnson, M. B., & Pinkston, S. G. 1973 Effects of practice, instructions, and modeling on components of assertive behavior. *Behavior Research and Therapy*, 11, 443-451.
- Hersen, M., Kabacoff, R. I., Van-Hassel, V. B., Null, J. A., Ryan, C. F., Melton, M. A., & Segal, D. L. 1995 Assertiveness, depression, and social support in older visually impaired adults. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, 89, 524-530.
- 平木典子 1993 アサーション・トレーニング 日本・精神技術研究所
- 平木典子 2005 職場のメンタルヘルス向上のためのアサーション・トレーニング 平木典子(編) アサーション・トレーニング 現代のエスプリ450 至文堂 Pp.81-88.
- 伊藤弥生 1998 アサーティブ・マインド・スケール (Assertive mind scale) 作成の試み 人間性心理学研究, 16, 212-219.
- Ittelson, W. H., Proshansky, H. M., Rivlin, L. G., & Winkl, G. H. 1974 *An introduction to environmental psychology*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc. 望月 衛(訳) 1977 環境心理の基礎 彰国社
- Kern, J. M. 1982 Predicting the impact of assertive, empathic-assertive, and nonassertive behavior: The assertiveness of the assertee. *Behavior Therapy*, 13, 486-498.
- 久木山健一 2002 情動コンピテンスと社会的情報処理の関連 カウンセリング研究, 35, 66-75.
- Kuperminc, M., & Heimberg, R. G. 1983 Consequence probability and utility as factors in the decision to behave assertively. *Behavior Therapy*, 14, 637-646.
- Kushnir, T., & Malkinson, R. 1993 A rational-emotive group intervention for preventing and coping with stress among safety officers. *Journal of Rational-Emotive and Cognitive-Behavior Therapy*, 11, 195-206.
- Lazarus, A. A. 1973 On assertive behavior. *Behavior Therapy*, 4, 697-699.
- Leah, J. A., Law, H. G., & Snyder, Jr., C. W. 1979 The structure of self-reported difficulty in assertiveness: An application of three-mode common factor analysis. *Multivariate Behavioral Research*, 14, 443-462.
- Lee, C. 1984 Accuracy of efficacy expectation in predicting performance in simulated assertiveness task. *Cognitive Therapy and Research*, 8, 37-48.
- McFall, R. M., & Lillesand, D. B. 1971 Behavior rehearsal with modeling and coaching in assertive training. *Journal of Abnormal Psychology*, 77, 313-323.
- McFall, R. M., & Marston, A. R. 1970 An experimental analysis of behavior rehearsal in assertive training. *Journal of Abnormal Psychology*, 76, 295-303.
- McFall, R. M. & Twentyman, C. 1973 Four experiments on the relative contributions of rehearsal, modeling, and coaching to assertion training. *Journal of Abnormal Psychology*, 81, 199-218.
- 松尾直博・新井邦二郎 1998 児童の対人不安傾向と公的の自己意識, 対人的自己効力感との関係 教育心理学研究, 46, 21-30.
- 無藤清子 2005 自尊感情を高める 平木典子(編) アサーション・トレーニング 現代のエスプリ450 至文堂 Pp.150-159.
- 中釜洋子 2005 親密な関係を築きそれを維持する 平木典子(編) アサーション・トレーニング 現代のエスプリ450 至文堂 Pp.171-180.
- Newby, F. E., & Schlebusch, L. 1997 Social support, self-efficacy and assertiveness as mediators of student stress. *Psychology: A Journal of Human Behavior*, 34, 61-69.
- Rogers, R. L., & Petrie, T. A. 2001 Psychological correlates of anorexic and bulimic symptomatology. *Journal of Counseling and Development*, 79, 178-187.
- 沢崎達夫・平木典子 アサーション・トレーニングの考え方と歴史 平木典子(編) アサーション・トレーニング 現代のエスプリ450 至文堂 Pp.30-36.
- 柴橋祐子 1998 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究, 31, 19-26.
- 柴橋祐子 2001 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12, 123-134.
- 柴橋祐子 2004 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育



- 心理学研究, 52, 12-23.
- Short, P. M., & Short, R. J. 1988 Perceived classroom environment and student behavior in secondary schools. *Educational Research Quarterly*, 12, 35-39.
- 園田雅代 2002 教師のためのアサーション 園田雅代・中釜洋子・沢崎俊之(編) 2002 教師のためのアサーション 金子書房 Pp.29-74.
- 園田雅代・中釜洋子 2000 子どものためのアサーショングループワーク 日本・精神技術研究所
- 園田雅代・中釜洋子・沢崎俊之(編) 2002 教師のためのアサーション 金子書房
- Stake, J. E., Deville, C. J., & Pennell, C. E. 1983 The effects of assertive training on the performance self-esteem of adolescent girls. *Journal of Youth and Adolescence*, 12, 435-442.
- 菅沼憲治 1994 アサーティブ行動の構造に関する因子論的研究 千葉商大紀要, 31, 19-46.
- 菅沼憲治 2002 セルフ・アサーション・トレーニング 東京図書
- 鈴木裕子・山口 創・根建金男 1997 シャイネス尺度(Waseda shyness scale)の作成とその信頼性・妥当性の検討 カウンセリング研究, 30, 245-254.
- 高橋 均・石井眞治 2005 アサーションによって生じる結果の効用評価がアサーションに及ぼす影響 日本社会心理学会第46回大会論文集, 630-631.
- 高橋 均 2006 児童のアサーションと学級風土認知の関連 学校教育相談研究, 16, 12-19.
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 2001 青年用アサーション尺度の作成と信頼性および妥当性の検討 奈良教育大学紀要, 50, 221-232.
- 豊田英昭 2000 小学校におけるアサーション・トレーニング(教育現場におけるアサーション) 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, S76.
- 宇部弘子 2000 アサーション行動とその背景にあるもの 桐生短期大学紀要, 11, 109-116.
- 渡部玲二郎・稲川洋美 2002 児童用自己表現尺度の作成, および認知的変数と情緒の変数が自己表現に及ぼす影響について カウンセリング研究, 35, 198-207.
- Watson, D., & Friend, R. 1969 Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 33, 448-457.
- Zollo, L. J., Heimberg, R. G., & Becker, R. E. 1985 Evaluations and consequences of assertive behavior. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 16, 295-301.

(主任指導教員 石井眞治)

